

派遣報告書

平成17年度～平成19年度「台北日本人学校」派遣教員

(現) やまぐち総合教育支援センター
子どもと親のサポートセンター
主査 森原 清



台北日本人学校

〒111

中華民國 台北市 士林區 中山北路6段785號

Tel.(02)2872-3811、3801 Fax.(02)2873-6744

E-mail : taipeijs@ms4.hinet.net

派遣報告書

派遣期間 2005年4月～2008年3月
派遣場所 中華民国(台湾)台北日本人学校

学校教育に関わる内容



1. 台北日本人学校の概要

(1) 概要

沖縄県与那国島のすぐ近くにある台湾。その中心都市、台北市は人口約260万の近代都市である。日本人学校はその中心部から約12km北に位置する天母という街にある。天母はもともとのどかな田園地帯であったが、日本人学校、アメリカンスクールが設置されると、そこに子どもを通わせる外国人が多く住み着くようになり発展した。今では日本語、英語、中国語の飛び交う、国際色豊かな街になっている。

日本人学校は、その天母の中心、中山北路と天母路が交差した場所にある。

(2) 児童生徒

全校児童生徒は732名(平成19年2月現在)。在外日本人学校としては、比較的大きな規模の学校である。

学級数は、小学部が3クラス、中学部は2クラスずつとなっている。

多くの日本人学校と同じように、両親のうちのどちらかが日本国籍ではなく、2つの国籍を持っている子どもたちが多いということが特徴の1つとして挙げられる。台北日本人学校は中でも、約3割の子ども達がそのような家庭環境にあるそのため、特に低学年においては、中国語の方が得意であるという子もいる。そのような子どもたちに対しては、T2による個別指導や放課後の日本語補習によって、独自の支援を行っている。

また、年間の編入・退学が200名ほどになる、大変入れ替わりの激しい学校である。



(3) 特色ある教育活動

特色ある教育活動としては、総合の時間を使つての「中国語」、「英語活動(英会話)」、「交流活動」を挙げることができる。(低学年においては、「中国語」「英語活動」については、学校裁量の時間で、「交流活動」については生活科で行っている)さらに平成17年度からは小学部3年以上に選択語学の時間を新設した。(これについては で詳しく述べる)

中国語

中国語は全ての児童生徒に対して週に1回1時間の授業を行っている。日本語の話せる現地採用教員が行う授業である。小学部においては、日常生活や校外学習で中国語が使えるような具体的な場面を想定した授業を行っている。すべての学年において、より高度な会話能力を身につけさせる為に、1学期から習熟度別の授業を行っている。(ただし、小学部1年生は1学期のみクラス単位)

英語活動(中学部:英会話)

英語活動は、小学部1年生から6年生までが行っているものである。週に1回1時間、ELT(English Language Teacher)による授業が行われている。中学部においては、週1時間英会話の授業を行っている。中国語の授業同様、習熟度別に3クラスに分けて3人のELTによる授業を行っている。天母地区は中国語だけでなく、英語を話す人も多い。また、アメリカンスクールもすぐ目の前にあるということで、英語は児童生徒ばかりではなく、保護者においても興味・関心が高い様子が見受けられる。

交流活動

交流活動は、現地校との交流を軸に現地理解教育を行っているものである。交流会は決まった現地校と1年おきにそれぞれの学校を招待するという形で行ってきた。例えば、今年度日本人学校の1年生が現地校を招待したなら、来年度は日本人学校の1年生は招待されるというやり方である。この活動はおよそ20年の歴史があり、現地校との恒例行事となっている。日頃学習した中国語を試す場であり、台湾への興味・関心を高めたり、台湾についての理解を深めたりする場でもあるので、重要な役割を担っている行事である。平成18年度より、小学部の3年生以上において、お互いの学校の実際の授業を受けるという一日交換留学を始めた。



選択語学

選択語学は本校での語学教育を推進する中で、英語に力を入れてほしいという声と中国語を充実させてほしいという要望を両立させる意味で新設されたものである。小学部3年生以上の学年で学校裁量の時間を1時間増やし、他の教科とのバランスを考えながら新設した。子どもたちは週に1時間、中国語と英語を学んでいるが、その経験と自分の興味関心をふまえて中国語か英語のどちらか一つを選択して学習を進めてきている。授業を担当する教師は、中国語1名・英語3名の合計4名で担当し、ひとつのクラスを4つにグループ分けして授業を展開している。

(4) 主な行事

運動会(5月)

本校校庭にて小中学部合同で行う。種目は基本的に学年や学部毎に行っている。

種目は一般的なものだが、開会の挨拶を小学部1年生が日本語と中国語で行ったり、現地校を招いてリレーを行ったりするのが特徴的である。

学習発表会(10月)

舞台発表は、平成18年度より小中同日開催している。小学部は学年毎の発表、中学部は学級毎の発表や英語と中国語のスピーチ大会を行っている。

図工や書写などの作品展示発表も特別教室にパネル等を設置して行っている。

修学旅行 小学部：高雄方面(11月)

中学部：長崎方面(9月)

小学部は、台湾原住民や台湾に尽くした日本人の足跡等を訪れる。

中学部は、平和学習や体験活動を重視した民泊を行っている。



(5) その他の行事

国際ドラゴンボートレース

台北市主催による国際レースに本校職員チームが毎年出場している。平成18年度は4度目にして、初めて一勝を挙げた。一般出場の優勝賞金は50万円だが、我々は招待組でアメリカンスクールやヨーロッパスクールと対戦することが多かった。



夏祭り

P T Aの夏祭り委員会によって催される日本人会の夏祭りには、毎年2000名ほどの参加者がある。

櫓を組んでの盆踊りや、有志による出店。また業者による食べ物などの店も校庭いっぱいにならぶ。



鑑賞教室・飛び入り行事

毎年、鑑賞教室を実施している。原住民の踊りを披露してもらったり、中国の伝統的な人形劇の鑑賞や人形の扱いを教わったりし、交流活動同様、台湾理解につながっている。

また、学校からの依頼や交流協会からの紹介により、年間に数回の飛び入り行事が行われる。台湾の開発に尽くした八田與一さんの親族をお迎えしたり、いっこく堂や関取、荒川静香さんなど台湾公演をした芸能人・スポーツ選手等が訪れたりすることがあった。



(6) その他の特色

保護者同伴

小学部においては登下校は保護者同伴の必要がある。台湾は比較的治安の良い地域であるが、それでも誘拐事件などは日本よりも多く、保護者同伴をお願いしている。放課後は学校で遊んで良いことになっているが、そこでも保護者監督の下という条件がある。学校への出入り口は正門のみであり、そこには守衛がいる。学校へ入る場合は、保護者証を見せるか入校証を借りることが必要になる。



弁当

給食はなく、原則として弁当持参である。特に、弁当は家庭からの持参だけではなく、マクドナルドや外食弁当の業者に注文をして購入することも認められている。そのため4時間目が終わると、校舎中央の弁当引き渡し場所には多くの子どもたちが並ぶことになる。

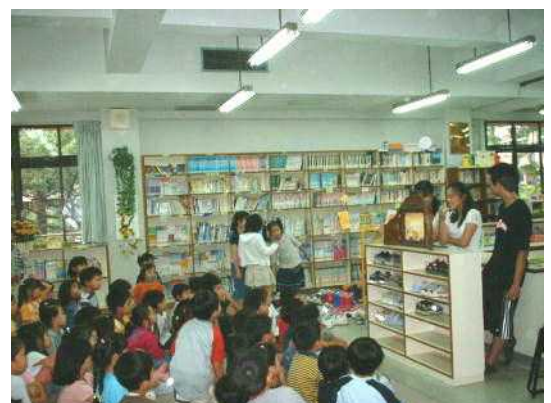


編入学・退学

編入学・退学の児童・生徒がとても多い。特に小学部低中学年では、およそ3割の児童が入れ替わることもある。そのため、1年間を見通した学級経営だけではなく、学期毎の臨機応変な対応が求められることになる。

小中併設校

小中併設というのも特色の1つといえる。運動会や学習発表会では小学生と中学生が協力しながら計画を立てたり、運営したりしている。委員会活動でも、放送や図書当番など連携を図りそれぞれの分担での仕事を行うこともある。また、中学生が、小学生に読み聞かせをしたり、そうじの手伝いをすることもある。



2. 台北日本人学校の歴史

台北日本人学校が開校したのは、1947年5月である。台湾大学独身宿舎を借りてのスタートであった。当時の名前を「国立台湾大学付設留台日籍人員子女教育班」と言い、小学部約50名、中学部40名からなっていた。

4年後の1951年に大学の都合により独身宿舎を返却することになったが、かわりに台湾大学の教室を借りることが出来るようになった。ただし、この頃は中学部は廃止、小学部は5～10名程度の児童が在籍するのみとなっていた。

その後、次第に児童の数は増加してきた。そのため1959年頃からは人数にあった場所を探しながら、転々と移ることになる。そして1983年にやっと現在の天母に新校舎を建設することができた。

天母に移ってからの児童生徒の増加は著しく、1988年には1000名を越すマンモス校となった。現在は児童生徒数はやや減ったものの、プール、体育館、コンピュータ室などが整備され、日本と同じような環境での授業が行えるようになっている。

各界著名人の訪問が多いことも本校の特色と言える。2003年3月には前総統 李登輝氏が講演を行った。また、同年7月には中国信託董事長 辜濂松氏、2005年11月には台湾初のノーベル賞受賞者である李遠哲氏が中学生を対象に講演を行った。

3. 施設紹介(写真)



運動場



ラバーコート



体育館



プール



コンピュータ室



図書室



スクールバス



水辺公園



遊具

詳しくは、本校ホームページ (<http://www.taipeijs.org/fukei/fukei.htm>) 参照。

4. 国際家庭児童・生徒の教育に関して

台北日本人学校での教育に関わって、最も特色あること。それは、「国際家庭児童・生徒」に関するものである。以下に報告したい。

(1) 在籍状況について

現在、台北日本人学校に在籍している国際家庭の児童・生徒数は、全体の約30%となっている。つまり、約730人の児童・生徒のうち、210人前後が国際家庭の児童・生徒である。この実数は世界の在外教育施設の中でも多い方だといわれている。

また、そのほとんどは父親が日本籍、母親が台湾籍となっている。逆のパターン（父親台湾籍、母親日本籍）の子どもたちの場合は、多くが台湾の現地校に通っているようである。

(2) 国際家庭の児童・生徒の傾向

台湾での生活が長い子どもが多い。生まれたときからずっと台湾で生活しており、日本を知らないという子どももいる。

中国語が堪能な子どもが多いので、台湾現地の学校との交流会や校外学習などでは、通訳として活躍する児童・生徒も多い。ただし、すべての国際家庭がバイリンガルで育てられているわけではない。

(3) 保護者の傾向

情に厚い台湾人の性格から、学校に対して協力的な保護者が多い。一方で、共働きなどで保護者が仕事を抱えており、学校の活動にほとんど姿を見せない家庭もある。また、台湾の教育しか経験したことのない保護者の場合、日本の教育方針に戸惑いを感じ、学校側との距離を埋めるための時間がかかる場合もある。

多くの家庭は日本の教育を受けさせたいという目的で、日本人学校に子どもを入学させている。一方で、台湾が生活の基盤になっているにもかかわらず、日本国籍を子どもに取得させ、日本人学校に通わせている背景には、台湾をとりまく政情が不安定であるという現実が横たわっている。国籍のことだけでなく、英語・中国語を含めた言語習得にも大変熱心な傾向がある。

(4) 教育上の課題など

日本語習得

台湾で生まれた子どもたちの中には、日本語の習得が十分ではない者もいる。特に小学校入学時に、日本語を上手に話せない子どもが、毎年数人ずつ在籍している。学校でも補習の体制をとっているが、生活言語が中国語という家庭も多く、しっかりとした習得には家庭の協力が不可欠である。在籍中にめざましく進歩する者もいるが、習得が不十分で学習全般に影響の出ている子どももいる。

進路

中学卒業後の進路は、主に、日本の高校への進学と、台湾の高校への進学に分かれる。ここ数年、台湾の政情が安定し、高校側の受け入れ態勢が整ってきたこともあり、台湾の高校へ進学する割合は増加している。過去3年間では、中学を卒業した国際家庭の生徒のうち約半数が台湾の高校に進学している。また、経済的に余裕のある家庭の場合には、海外の上級学校に進学する場合もある。

選択肢が多岐にわたるということは、自分にあった進路を幅広く選べるということでもあるが、一方で、進路をなかなかしぼりにくいという現象にもつながってくる。保護者が日本人の家庭に比べると、進路指導・進路選択の持つ重みは桁違いに大きいといえる。

(5) 学校体制について

日本語補習

ア 日本語補習の必要性

学校では、入学願書受付時や編入学時に面接を実施し、児童生徒が学年相応の日本語能力を有し、学校生活を送る上で支障をきたすことがないかをみる。

しかし、入学後、日本語能力が不十分で日常生活において友達とのコミュニケーションがうまく図れない、また、教師の指示が理解できず、学校生活の適応が難しいと心配される場合がある。そこで、日本語補習が必要となる。

イ 日本語補習の今まで

記録で確かめられる範囲では、平成に入ってから日本語補習を行っている。

平成2年 ・現地の大学で日本語を教えている教授を招き、有料で実施。

平成7年 ・週1時間 図書の時間に取り出し授業を実施。

・対象児童：1年生15名

・指導者：現地採用教員

平成8年 ・対象児童を2年生まで広げる。

・対象児童：1年15名、2年9名

・指導者：現地採用教員

平成9年 ・6時間目の授業時間(低学年は放課後)に低学年の児童を集め習熟度別3クラスで実施。

・Aクラス：日本語が全くできない子

・Bクラス：聴く能力は少しあるが、話せない子

・Cクラス：会話と文意の理解を深め、早く学級児童と同等の能力になるように鍛える

・対象児童：1年生13名、2年生11名

・指導者：現地採用教員1名、教務、学級担任

平成10年～平成13年

・放課後補習を1年生と2年生以上の2クラスで実施。

・対象児童：13～33名

・指導者：1年生担当、現地採用教員、2年生担当、教務等



平成14年度

1年生については国語の授業を時間割編成で同時間に設定し、国語の授業時間に取り出しを行い、日本語補習室で国語の教科書を使って学習した(1年生の対象児童は9名、指導者は学部主任と現地採用教員)。2年生については、放課後補習を引き続き実施した(対象児童は6名、指導者は現地採用教員)。

2学期からは、原学級で国語の授業を一緒に受ける。特に支援が必要と判断された児童の在籍する学級には、現地採用教員がTTとして入り込んだ。派遣教員は、昼休み時間を利用し、引き続き日本語能力の向上を図るため、音読やプリント学習を行った。

平成15年度～平成19年度

1年生については、昨年同様に国語の授業を時間割編成で同時間に設定し、国語の授業時間に教師が入り込む形を取った。TT形式以外にも1～3年生の対象児童に対して、週2～3時間の放課後補習を行った(対象児童5～12名)。時間や児童数、対応学年は年度によってちがう

国際家庭の児童・生徒の教育に関する保護者会と研修会

年2回の保護者会の開催、教職員を対象にした研修を行っている。保護者会では、生活・学習上の課題について話し合ったほか、特に台湾の高校に関する進学情報の提供を行った。また、実態把握のためのアンケート調査なども実施した。

5. 台北日本人学校における研修

(1) はじめに

派遣教員は、それぞれの都道府県に所属しながら、「長期研修出張」という立場で、各国に派遣されており、勤務自体が研修ということになっている。

しかし現実的には、各校ともそれぞれの課題を設定し、国内同様の形で「研修」を行っている。台北日本人学校では、以下に紹介するような研修に取り組んでいた。

(2) 具体的な研修内容

【 研修年間計画 】

月	研修内容				
4	<table border="1"> <tr> <td>計 画</td> <td> 研修計画立案(研修部会) 研修年間計画の確認・年間のスケジュール 研修内容の検討、確認 授業実践の進め方について検討 </td> <td> 研修全体会(4月) 研修年間計画 研修内容 授業実践・公開の計画・授業公開の内容、方向性について </td> </tr> </table>	計 画	研修計画立案(研修部会) 研修年間計画の確認・年間のスケジュール 研修内容の検討、確認 授業実践の進め方について検討	研修全体会(4月) 研修年間計画 研修内容 授業実践・公開の計画・授業公開の内容、方向性について	
計 画	研修計画立案(研修部会) 研修年間計画の確認・年間のスケジュール 研修内容の検討、確認 授業実践の進め方について検討	研修全体会(4月) 研修年間計画 研修内容 授業実践・公開の計画・授業公開の内容、方向性について			
5	<table border="1"> <tr> <td>実 践</td> <td> 提案授業(小学部) 授業実践(全員公開) ブロック代表者による代表授業と研究協議 </td> <td> 研修全体会(5月) ・情報教育に関わる研修 研修全体会(夏季休業中) ・現地理解研修 午前 体験型研修...中国ゴマ、中国結び、調理実習 午後 参観型研修...台湾高速鉄道見学 研修全体会(9月) ・国際家庭に関わる研修 研修全体会(11月) ・進路に関わる研修 研修全体会(12月) ・現地校視察研修 </td> </tr> </table>	実 践	提案授業(小学部) 授業実践(全員公開) ブロック代表者による代表授業と研究協議	研修全体会(5月) ・情報教育に関わる研修 研修全体会(夏季休業中) ・現地理解研修 午前 体験型研修...中国ゴマ、中国結び、調理実習 午後 参観型研修...台湾高速鉄道見学 研修全体会(9月) ・国際家庭に関わる研修 研修全体会(11月) ・進路に関わる研修 研修全体会(12月) ・現地校視察研修	
実 践		提案授業(小学部) 授業実践(全員公開) ブロック代表者による代表授業と研究協議	研修全体会(5月) ・情報教育に関わる研修 研修全体会(夏季休業中) ・現地理解研修 午前 体験型研修...中国ゴマ、中国結び、調理実習 午後 参観型研修...台湾高速鉄道見学 研修全体会(9月) ・国際家庭に関わる研修 研修全体会(11月) ・進路に関わる研修 研修全体会(12月) ・現地校視察研修		
6					
7					
8					
9					
10					
11					
12					
1	まとめ	<table border="1"> <tr> <td></td> <td>研修のまとめ作成</td> <td></td> </tr> </table>		研修のまとめ作成	
	研修のまとめ作成				
2		<table border="1"> <tr> <td></td> <td> 研修全体会(1月) 研修の成果等の総括 授業公開・実践・職員研修の反省とまとめ </td> <td></td> </tr> </table>		研修全体会(1月) 研修の成果等の総括 授業公開・実践・職員研修の反省とまとめ	
	研修全体会(1月) 研修の成果等の総括 授業公開・実践・職員研修の反省とまとめ				
3					

校内研究

ア 研究テーマ(平成19年度)

児童・生徒が学び合い、高め合う授業をめざして
 ~ 個と個の学びをつなぐ支援の工夫を通して ~

イ 研究内容

本校では平成16年度より、それまで行っていた個人研究の形を集団研究とした。学年やブロックを単位として「つながり」と「積み重ね」のある実践を心がけ、教師としての力量の向上に大いに役立てた。しかし多くの時間が必要で、また小中合同で研究を進めることは大変難しかった。そこで平成18年度は研究テーマを継続し、それまでの研究の成果を生かしながら、「児童生徒にとって充実感のある授業実践の提案」に取り組んだ。その結果、それぞれが自分の長所を生かしながら研修に取り組みつつ、教育活動へゆとりを取り戻すことができた。

さらに平成19年度においては、児童・生徒の実態を改めて見直した。編入・退学の多い本校の児童・生徒においては、様々な理由から生活の自由も制限されており、人間関係づくりや精神面・体力面の発達において十分配慮された取り組みの必要性があると考えた。そこで新たに全体テーマを設定し、さらにブロックでも児童・生徒の実態に即してテーマを設けて、実践・検証に取り組んだ。

平成19年度 研究の成果

小中学部の授業者の教科・領域等の実践を通して、児童・生徒相互のさまざまな「学び合い、高め合う」姿を見出すことができた。そして、個と個の学びをつなぐ具体的な支援として、大きく2つの視点が有効であると考えられる。

(1)「学び合い、高め合う」ための個の学びの育成について

特定の教科・領域にかかわらず

「書く」「記録する」という活動を日常的に繰り返すことを通して、表現力を育成することができる。
「話し合い」の場面を通して、友だちの意見を「聞く」、自分の考えを「話す」「伝え合う」能力を高めることができる。
「振り返りの活動」を授業に位置づけることを通して、学習内容や友だちとのかかわりについての価値や意義を深めることができる。

(2)「学び合い」を生み出す個の学びをつなぐ工夫として

小学部では

絵や具体物、お話や図など、共通の学習課題が、視覚的にとらえられる場の工夫

話し合いや意見交流など発表や表現形態の工夫

【動作化（役割演技）グループ発表や討議、読書アニメーション、ジグソー法的な学習など】

学習活動の中に友だちに伝えなければならない必然性が生まれる内容を設定する。

【実験の結果、計算の仕方や図形の仲間分け、演技の発表、班づくりのきまりなど】

一人一人の発表や表現の機会を増やす。

中学部では

興味・関心を高め、自分の考えをつくり、相互に意見交流できるような教材（題材）の工夫をする。

【トピック的な学習問題、音読の仕方、解剖実験、地図の見方など】

コースや課題を選択する授業形態や学習方法を通して、少人数での協同学習や意見交流が生まれる工夫をする。

【パートごとの合奏練習、競技の見合い、ペア学習での会話練習など】

お互いの意見を尊重し合う環境づくりをする。【初読の感想の一覧表を配布、グループでの観察など】

課題

- ・あらゆる教科・領域で「学び合い、高め合う」授業をめざした日常的、継続的な取り組みを行うこと。また、そのための支援をさぐること。
- ・児童・生徒の「学び合い、高め合う」姿の変容を検証していけるような継続的な取り組みを行うこと。
- ・確かな学力に結びついた「学び合い、高め合う」取り組み

現地理解研修とその他の研修

児童・生徒数の約3割が国際家庭の子ども達であり、我々教師にも現地の教育事情についての知識が要求される。また長期研修で台湾に派遣され、絶好の機会を得たわけであるから、現地を理解するための研修にも積極的に取り組んでいる。その中からいくつかを紹介する。

ア 体験型研修会

中国ゴマ



台湾料理



中国結び



イ 見学型研修会（主に本校児童生徒が社会科見学を行う場所を対象として選択・実施した。）

文山農場（お茶園）見学 司法院・立法院見学 國瑞汽車(トヨタ)工場見学 台湾高鐵見学

～小学部3年 社会科～



～小学部6年 社会科～



～小学部5年 社会科～



ウ 現地校訪問

三玉國小學



天母國中學



静修女中



エ 現地校進学に関する研修

現地校進学説明会



現地校に進学した本校卒業生を招いて

研修のまとめ

毎年3分の1程度の派遣教員が入れ替わるという点から、校内研究や職員研修、交流会の取り組み、学習指導（基礎基本の定着）の取り組みなどを学年や学部ごとにまとめ、紀要を作成している。厚い冊子にはなるが、引き継ぎ的な要素を含んでいることもあり、今後も継続していくと思われる。

その他

本校への学校訪問も積極的に受け入れ、授業を公開してきた。

- ・現地幼稚園との情報交換
- ・現地國小、國中の教師や生徒の研修
- ・現地大学生の研修
- ・現地の教育研究団体の研修
- ・法人企業の社内研修
- ・日本国内の学校、教育委員会からの視察等

(3) 終わりに

これまでの研修で我々は、多様な教科・領域の授業を互いに提案し合い、その過程において教師自身の力量を高めることができた。多忙な日々の中で、ややもすると見落としがちになってしまわぬよう、「教師の力量は授業にあり」を忘れずにこれからも教育活動に邁進したい。またアジアにある日本人学校は、中・大規模校が多く、国際家庭の児童生徒の割合も高い傾向にある。したがってどの学校でも、この点についても十分に配慮を重ね、教育活動を進めているはずである。つまり日本人学校での校内研究・現地理解等の研修の必要性（継続性も含めて）は極めて高く、今後ますますその充実が求められるということである。そのために、派遣教員一人ひとりが、「ここに派遣された」という事実を常に振り返りながら、「児童生徒のために」との思いを強くもち、互いに力を合わせて研修を進めていくことが、国内以上に求められている。

6. 台北日本人学校の危機とその対応

(1) 台風来襲



台湾は亜熱帯地域で、台風が襲来する回数が多くある。それによって学校行事を変更したり中止にすることも頻繁に発生する。

台湾の場合は、台風への対応が早く、学校の休校や仕事の休みは全てテレビ放送を通じて早い段階から行われる。学校の緊急連絡体制も整備されており、テレビ放送を待って全員に連絡されるというシステムがとられている。

また、学校の台風対応としては、台風発生時から進路を確認し、保護者への通知が行われる。学校備品の飛散防止が全職員によって行われ、できる限りの準備対応がなされる。それでも襲来後は被害

が大きく、木々が倒れたり、飛散物が散乱したりと修復作業に時間がかかることがある。

(2) 腸病毒

腸病毒とは、手足口病やヘルパンギーナ等で知られる何種類かのウィルスの総称である。世界各地でウィルスは存在し、普通は夏と初秋で流行する。台湾は亜熱帯なので、一年を通じて感染する可能性がある。腸病毒に感染すると、大多数の感染者は症状がなく、あるいは軽く、数日で自然に治癒することも多い。典型的な症状としては、口、手のひら、足の裏に水泡潰瘍ができる。それに伴い、熱が出ることもある。病程は7日から10日程度。また、きわめて少ないケースだが、合併症を引き起こすこともあるので油断はできない。今から9年前には台湾でも大流行をし、死者が発生し、大騒ぎになったということで、台湾行政省の流行への対応には迅速かつ慎重なものがある。しかも、発症から1週間ほどたった後に、劇症化する場合があります、学校では完治するまでの間出席停止措置をとっている。

学校においては、感染者がでる度に教室の消毒を行ったり、感染者の割合に応じて学級・学年閉鎖を行ったりしながら、感染拡大予防に努めている。



(3) デング熱

デング熱は、台湾独特のものではなく、アジアや太平洋諸島など熱帯亜熱帯地域で広く分布するウィルスによって引き起こされる感染症である。デング熱ウィルスを保有している蚊(ネッタイシマカ、ヒトスジシマカなど)に吸血されることにより感染する。

台湾疾病管制院が蚊の大発生をさけるため、日本人学校にも監査に来られる。昨年度は教室のテラスにある水がたまったままのバケツや、アサガオの鉢の下の皿に蚊が発生するおそれがあるなどの指摘を受け、即日改善した。今年度も監査に来られたが、指摘されていた点は全てクリアしておいたので、「合格」であった。

(4) 頭ジラミ

アタマジラミは頭髪に寄生する吸血性の昆虫である。さされるとかゆみがあり、頭髪から頭髪へうつっていく。清潔にしていなくても寄生することがあり、兄弟や教室内での感染も多い。成虫も卵も、よく見れば発見することが可能である。成虫・卵ともに、処方されるシャンプーを使うことで駆除することができる。

学校においては、保護者にもプリント等で成虫や卵の有無を確認してもらうよう促し、感染している際には医師に診せ、早急に対処してもらうよう随時呼びかけている。また、頭ジラミが発生した教室については、薬(主にバルサン)を使って駆除し感染拡大に努めている。

台湾での生活

1. 台湾の概要

(1) 台湾の文化、歴史、位置など

一般に台湾と呼ばれているが、正式には「中華民国」が国号である。孫文による辛亥革命で成立したアジアで最初の共和国である。中国の代表権問題がからむため、通常国連加盟国の間では、Taiwanの名称が使われている。オリンピックなど国際的な競技会などでは、「中華台北(チャイニーズ・タイペイ)」の呼称が定着している。

国内では「民國」という年号を使用しており、辛亥革命の翌年元旦の1912年1月1日が開国記念日と制定されたので、この年が民國元年にあたる。(ちなみに2008年は民國97年)

人口は、2200万人を超える。1平方キロメートルあたりの人口密度は600人を超え、日本の2倍近くで、アジア第3位である。

大多数の漢民族のほかに、先住民族が住んでいる。宗教は仏教と道教、儒教が渾然一体となった多神教で、キリスト教などの信者も多い。台湾全島に寺廟、教会が8千カ所以上ある。標準語は中国語(国語=北京語)で、その他に台湾語、客家語など、原住民にもそれぞれ独自の言語がある。日本統治時代に日本語教育を受けた65歳以上の年輩の方は日本語も話すことができる。

アジアの人々の中でも、国民の勤勉性と近年では大陸経済との関係強化により、ここ数年際立った経済発展を遂げている。一人あたりのGDPは、アジア諸国の中では日本、香港、シンガポールなどに次ぐ水準で第6位である。良質の製品を日本や世界各国に提供しており、東アジア経済発展の原動力になっている。また、日本は工業製品ばかりでなく、多くの農水産物の供給も受けており、今後もあらゆる面にわたる強い結びつきが予想される。

このような背景の下で、文化面・経済面で日本との結びつきはますます強くなり、日本の書籍や雑誌が多くの書店で販売されている。また、海外向けのNHK放送や日本語専門チャンネルなどをケーブルテレビで視聴でき、日本人の家庭はもとより、多くの現地の人たちも受信している。



(2) 人口、民族

総人口2288万人(2006年12月末現在)1946年の609万人と比較すると3.7倍になっている。人口密度は1km²当たり627人で世界第9位の人口過密地域である。主要都市の人口は、以下の表の通りである。

都 市	人 口
台 北 市	263万人
高 雄 市	151万人
台 中 市	104万人
台 南 市	76万人

(2006年4月現在)

民族構成は、漢民族が98%を占める。中国大陸から移住した子孫である本省人と国共内戦に敗北した中国国民党政府と共に移ってきた外省人がいる。先住民族は、約30万人。大きく12の族にわかれている。



写真は2001年12月6日 鑑賞教室で原住民(ブヌ族・アミ族)の方に踊りを披露してもらった時のもの。

(3) 台湾の気候

台湾のほぼ中央部（嘉義）を北回帰線が通っていて、大部分は亜熱帯性気候。南部は、熱帯性気候となっている。一般に高温多雨で、気候は地域と季節によって異なる。夏期は5月～10月までと長く、7月～8月には最高気温が30度を超す。冬期は南北の差が大きく、最冬季の1月～2月の月平均最低気温は北部では16前後、南部では20。また冬期は南部が乾季であるのに対し、北部では雨の日が多い。

主要都市の気象概況（1997年～2001年平均 東京 那覇の記録は2001年）

都 市	平均気温（ ）	降雨日数	年降雨量（mm）
基隆（台湾北部）	23.0	203	4087
台 北	23.1	174	2913
台 中（西部）	23.7	120	1864
花 蓮（東部）	23.7	148	2354
高 雄（南部）	25.2	99	2288
東 京	15.6		1405
那 覇	22.4		2036

12月でも30近くまで気温が上がることもあり、クーラーを稼働させることがある一方、翌日は一気に寒風吹きすさぶような気温に下がることもあった。

(4) メディア等

1988年1月8日からの新聞自由化で、新聞社の登録が増え、1987年の31紙から2000年には433紙に達している。発行部数は約365万部で、聯合報、中国時報、蘋果日報、自由時報などが主要紙。地上波テレビは台湾テレビ（台視）などの民放4局に加え、1998年の7月に開局した公共テレビ（公視）が参入で現在5局になっている。ケーブル（有線）テレビは1993年7月に有線電視法成立し合法化されたため、急激に増えた。1998年、台北市におけるケーブルテレビの敷設率81.3%に達している。2003年には、客家語専門チャンネルが、その後は原住民専門チャンネルも誕生した。ラジオは142局。公営、軍営、警察放送のほか民放局、FM局もある。

2005年4月現在

項目	データ
ラジオ放送局	142局
地上波テレビ放送局	5局（民間局4と公局1）
衛星放送システム	123社
ケーブルTV局	90社あまり
新聞	474紙
出版社雑誌数	8140社
書籍出版社	7810社

中でも特徴的なのは、日本のテレビ番組が多数放送されていることである。日本のバラエティ番組やドラマ、NHKの大河ドラマや紅白歌合戦などまでいろいろなジャンルに渡って北京語字幕つきで放送されている。

日本のアニメーションも北京語に翻訳され、子ども用の放送局にて多数放送されている。ドラえもん（多拉A夢）ちびまる子ちゃん（小丸子）などは、日本同様人気がある。キャラクターグッズも多数販売されている。

また、日本の漫画をベースにしたテレビドラマも多数放映されている（「おいしい関係」、「花より男子」、「スラムダンク」、「いたづらなキス」など）。放映回数は20回前後。もちろんすべて北京語で放映されるが、主人公の名前が日本名のままだったり、場所の設定も日本だったりするのがおもしろい。台湾に親日的な方が多いことや、若い人たちの中に日本語に興味を持つ人たちが多いのには、こうした背景も大きく影響していると思われる。

2. 台湾での生活

(1) 食生活

台湾と言えば、やはり「食」。大陸(台湾では中華人民共和国をそう呼んでいる)の各地から集まってきており、いろいろな中華料理が食べられる。

一口に「中華料理」といっても、実は、日本でよく知られている小籠包は上海料理、麻婆豆腐は四川料理、飲茶は広東料理等さまざまである。食材、調理法、味付けなど種類豊富で、麺だけでも牛肉麺、トマト麺、担仔麺などいろいろある。屋台で食べるのも風情がある。持ち帰りも簡単にできる。高級料理もあるが、手頃な値段でおいしく食べられるのがうれしい。台湾ならではのものを紹介したい。

台湾料理

台湾の温暖な気候や島国ならではの産物を用い、農村で作られていた家庭料理。

菜脯蛋(干し大根いりオムレツ)や米粉(ピ-フン)など。

屋台でよく見かける料理

- ・鱈仔煎 カキのオムレツ、ゼリーのような食感もある。
- ・臭豆腐 発酵した豆腐を揚げたもの。煮込んだものは文字どおり臭いが、おいしい。
- ・潤餅 台湾クレープ、薄い皮でいろいろなきざんだ野菜を巻いて食べる。
- ・甜不辣 いわゆるさつまあげ、テンプラーと読む。日本語に漢字を当てている。



果物

果物が豊富で一年中食べられる。旬の果物をトラックの荷台一杯に果物をのせ、売っている姿がよく見られる。また、100%生ジュースやマンゴーかき氷、パイナップルミルクなども人気がある。

- ・荔枝(ライチ) 日本では冷凍物しか食べられないが、台湾では枝に連なっている。
- ・芭樂(グアバ) あっさりした味、食べなれると癖になるおいしさ。
- ・蓮霧(レンブ) 赤くてベルのような形、シャリシャリ感がおいしい。
- ・火龍果(ドラゴンフルーツ) 龍のように鬚がある、中は白くて黒い粒粒がある。
- ・楊桃(スターフルーツ) まさしく星の形をしている。



お茶

中国茶は発酵の度合いによって、色、味わいが違ってくる。発酵のすくないものは日本の緑茶のようにあっさりしている。小さな茶器で香りを楽しみながらいただく。台湾では、凍頂烏龍茶、高山茶など半発酵のお茶が多い。発酵度が高く、紅茶のような味わいの「東方美人」もおいしい。



酒

台湾の酒と言えば紹興酒。原料は、もち米、小麦、蓬萊米で、アルコール度40%。小さなグラスで飲む。干した甘酸っぱい梅干や干切りのしょうがをたっぷり入れて飲むのが好まれている。「乾杯」の発声で、全部飲み干すのが礼儀とのこと。



特別料理

・お正月 魚一匹丸ごと似た料理やもやし料理など縁起をかついだ料理を食べる。魚は全部食べ尽くしてはいけないと言われている。「年年有餘」という言葉があり、魚は中国語で「ユウ」と発音する。「餘」と同じ発音にあたるため、物やお金が有りあまるように残す。もやしは、その形が「如意」を表し、順調に進むようにという意味がある。お金の形に似ていると言われている餃子を食べる家庭もある。なお、一月一日ではなく、旧正月の際に家族で揃って食べる。

・誕生日 長生きをするようにと、そうめんを食べる。麺は日本のものよりも長い。寿命が縮まるため、途中で切ってはいけないとのこと。

(2) 交通

MRT (マス・ラピッド・トランスポーション)

交通渋滞の緩和を考え、陳水扁総統が台北市長のころの1995年に開通した地下鉄(モノレールのところもある)「MRT(捷運)」は、台北市内の東西南北を結ぶ重要な交通手段となっている。

どんなに長い距離を利用しても、せいぜい料金が30元程度(日本円で100円程度)と格安。本数も5分に1本を目安に、絶え間なく運行されており、大変便利な交通機関である。

バス・タクシー

バスは、市内各地を拠点に、かなりの本数で運行されている。1区間15元(50円程度)で利用できるのも、朝晩どのバスもたくさん利用者が乗っている。

また、タクシーもよく利用される交通手段である。いつでも、どこでもタクシーは数多く走っており、料金も台北市内から日本人学校のある天母までの長い距離(12キロメートル程度)でも、250元程度(800円程度)と日本に比べかなり安くなっている。

しかし、バス・タクシーともに運転が大変荒いので十分注意して乗らなければいけない。

バイク

市民の一番の足になっているのは、バイク(スクーター)である。旅行雑誌などにも掲載されているが、台北市内は、スクーター天国、自転車代わりに多くの人々が使用している。



(3) 台湾の風習

台湾人の乾杯

グラスを両手で持ち、相手の人と目と目を合わせ、「乾杯(カンペイ)」と言う。同時に酒を飲み干し、飲み干したらグラスの中が相手に見えるように傾け、酒が残っていないことを確認してもらう。飲み干せない場合は「随意(スウェイー)」と言う。「乾杯」の場合は飲み干すのが基本であるが、最近では、最初から好きな量だけ飲む随意のスタイルが多いようである。食事中に何度も乾杯をする姿が見られるが、みんなで楽しく飲みましょうという心遣いからである。

台湾の昼寝

台湾の学校では、昼寝の時間がある。昼食の後、30分~1時間程度、みんな机に伏して昼寝をする。夏の暑い時期には至福のひとつであるが、日課に組み込まれているため、外で遊びたい盛りの中学生や高校生にとっては苦痛に感じられるときもあるようである。ちなみに台北日本人学校では昼寝の時間は設けていない。台湾の会社によっては昼寝ができるように昼休みの時間を長くしているところもある。

台湾人の信心深さ

台湾人は一般に信心深い。道教のお寺である廟(ミャオ)が、街のあちこちにあり、絶えず人が拜拜(パイパイ=お参りのこと)している。若い人たちが熱心に祈りを捧げている姿もしばしば見かける。

厄を払ってもらおう人や石のような特別な道具を用いて神様にお伺いをしている人など老若男女を問わず多い。毎月二回、旧暦の一日と十五日には家の前でお供え物をし、拜拜する姿も見られる。

占いやまじないなども日本より盛んである。新年のテレビニュースでは、著名な占い師が登場し、主要な政治家の今年を占っている。地下鉄工事の際に風水師が登場し、方角が悪いなどと言ったものだから工事が進まなくなったり路線が変更されたりしたという話もある。占いで子どもの名前や、結婚式の日取りを決める人もいると聞いている。また、旧暦の7月のある時期は、鬼がさまようといわれており、水死をおそれて子どもをプールに入れないようにしたり、旅行を控えたりする人も多い。



(4) その他

夜市

台湾の観光スポットとして、夜市をはずすことはできない。夜市は台北市内だけでなく、台湾全土のあちこちで開催されており、グルメ天国を確認する意味からも、ぜひとも立ち寄りたいスポットである。その中でも士林夜市は台北最大規模を誇り、広い範囲に様々な屋台やお店が無数にひしめき合い、平日でも深夜の1時2時まで、大勢の人であふれかえっている。(日本人観光客も大変多い)



各種の台湾小吃(B級グルメ)は内外にその名を馳せており、B級グルメを求めてここを訪ねる観光客は後を絶たない。「大餅包小餅(春巻のようなもの)」、「石頭火鍋」、士林名物、ジャンボソーセージなどはグルメのランドマークにもなっている。



ナイトマーケットの近くには、学校が多く立ち並んでいるため、主要な客層は学生で、価格も一般のお店に比べ割安になっているのが特徴。家具店、ブティック、DPEショップ、ペットショップなどが軒を連ねているエリアもある。『情人巷』(恋人通り)と呼ばれる通りに立ち並ぶ小物ショップやかき氷店に、遠くからわざわざ足を運んでくる人も少なくない。

足裏マッサージ

台湾が流行発祥の地といわれる足ツボマッサージは、中国の民間療法のひとつ。30分という短い時間で、リーズナブルな価格で施術してもらえ、ということで、今やリラクゼーションの中心的存在となっている。

特に台北には中心街だけでもマッサージ店が400軒以上あるといわれていて、街中は「足裏マーク」の看板であふれている。競争が激しい中、各店のサービス項目もバラエティーに富んでいて、足ツボの看板を出しながら、民間治療の手段として発達した経絡マッサージもサービス項目にしている店や、いわゆる「理髪店」と呼ばれるマッサージパーラーやSPAなどでもオプションで必ず足ツボが入っている。



典型的な30分のマッサージの手順としては、

- ・足湯(無料の場合が多い)
- ・足ツボ(左足 右足)
- ・温シップ(膝下)
- ・膝下の按摩(2~3分)

値段は、平均30分あたり500~600元(日本円で1500円前後)

温泉

台湾のあちらこちらに温泉がある。個人風呂がいくつもあるのが台湾式であるが、大衆浴場も増えてきた。また、露天風呂があっても、台湾式では水着を着用するのが普通である。日本と同じように裸で入浴する風呂も増えてきているが、この場合男女の区別が厳しく、子どもでも男の子は女風呂に入れない(逆も同じ)。天母地区のすぐ北に、陽明山(ヤンミンシャン)という山があり、避暑地あるいは温泉地として多くの人々が訪れる。一步、足を踏み入ると日本にいるかのような錯覚に陥る。天母の北に位置する北投という地域も日本統治時代から賑わう温泉街で日本人もよく訪れる。料金は、一回150元、200元、高いところでは600元と設備によって異なる。

中国語と日本語

現在、MRTの駅では4種類の言語がアナウンスされる。まずは、北京語、続いて台湾語、客家語、そして、英語と続く。

台湾で「国語」といえば、北京語になる。台湾の学校でもほとんどが北京語で話される。しかし、台湾語を話す人も多い。特に台湾南部に台湾語を母語としている人が多い。日本人の感覚からは想像できないことであるが、北京語と台湾語は外国語のように全く異なる。

台湾語は、元々は福建省南部の言葉で17世紀に台湾に移り住んできた人々が使っていた「ピンナン語」という言葉が基で全く同じと言っていいほどよく似ている。客家語は、多くが広東省から移ってきた人々の言葉であるが、年代的には少々台湾語より後になる。この他にも各種原住民の言語もあ

り、お互いに全く意味が通じないほど異なっている。ちなみに、異なった原住民間でのコミュニケーションで興味深いのは、互に行き来が少なかった部族間においては、日本語が共通語としてコミュニケーションを助けている場合があるということである。これは統治時代、強制的に日本語を習わされた影響からである。(70才以上の方は日本語を母語としている人もいる。)

日本人向けの店や日本からの企業進出が多いせいか、町にも日本語が溢れている。高校以上では日本語習得のコースや、日本語の塾もたくさん存在する。ただ、これだけ親日的で日本語を話せる人が多いのに、メニューや看板に日本語の間違が多いのは不思議である。

テレビを見ていると、ほとんどが字幕つきである。台湾語の発音が違ってても、漢字は同じため、理解できるのである。台湾語は戒嚴令下中期まで、公共の場での使用を禁止されていた。最近では台湾語を用いたドラマが増加している。国民党以外からの初の総統である陳総統になってから、ますます台湾人のアイデンティティーが論議される機会が増え、その結果として台湾語を見直そうというムードが高まっている。各小学校では週一時間台湾語などの方言を学習する時間が設けられている。

いくつか北京語を紹介したい。()内は意味を表す。

日本語と意味の異なる言葉

- ・太太(奥さん) ・先生(夫・男性全般) ・老師(先生) ・大丈夫(強い男)
- ・勉強(無理をする) ・走路(歩く) ・叫走路(首にする)
- ・汽車(自動車) ・火車(電車) ・機車(バイク) ・開夜車(徹夜する)
- ・告訴(言う、知らせる) ・怪我(私が悪いの?) ・裁判台(審判台)・勉強(無理をする)

日本語にはないが「なるほど」と納得する言葉

- ・隱形眼鏡(コンタクト) ・自行車(自転車) ・健行(ハイキング) ・黒社会(マフィア)
- ・電腦(コンピュータ) ・手機(携帯電話)

日本語が一般名詞として残っている言葉

- ・便當 ビエントン(弁当) ・烏龍麵 ウーロンミェン(うどん) ・一級棒 イチバン(一番)
- カタカナは読み方を表す。

【台湾語】・オリサン(おじさん) ・オバサン(おばさん) ・ウンチャン(運転手) トマト(とまと)

おもしろ誤植写真集



「ダレイプ」



「クリーニソグ」



「ドーナツ」

選挙

台湾での選挙活動は、とにかく派手。日本では良く台湾議会の熱血ぶりを報道されることがあるが、選挙活動もかなり熱が入っている。

街中に街宣車が走り回り、交差点や公園にはのぼりがこれでもかと言うほど立てられる。

ビルの壁面いっぱい飾られた選挙ポスターには誰でも驚くであろう。



3. 台湾の祝日・イベント

台湾の祝祭日は、～節という。主な節とそれにまつわるイベントを紹介する。

新暦元旦（中華民国開国記念日）1月1日

台湾の祝日は、旧暦（農歴）で決まるものがほとんどなので、新暦のお正月は元旦だけがお休みで、2日から、学校も会社も動いている。ただし、最近では台北101（ビル）の爆発イベントが非常に盛り上がっている。

1912年1月1日。孫文の革命成功によりアジアで初めての民主共和国が創立された日でもある。

春節 旧正月元旦（2008年は2月7日）

台湾では、こちらが本当のお正月。旧暦の大晦日から3日まで、会社や公共機関がお休みになる。家族が集まり、春の到来を祝う。街は爆竹の音で覆われる。1年で一番の長い休暇なので日本同様、旅行に出かける人がたくさんいる。

ちなみに台湾では、初詣の習慣はほとんどない。

元宵節 旧正月15日（新年最初の満月）

新年最初の満月を祝う日。学校はお休みではないが、各地でランタン祭り開かれる。

台北市内中正記念堂のランタン祭りでは、その年の干支にちなんだランタンが鮮やかに飾り付けられる。

台北からバスで1時間ほどのところの平溪では、熱気球の原理を利用したランタンに願い事を書いて空に打ち上げる祭典が開かれる。夜空にランタンが一斉に放たれる瞬間は、華やかさと幻想的な美しさがある。



中正記念堂ランタン祭り



平溪ランタン祭り

二二八和平記念日 2月28日

2002年に指定された新しい祝日。1947年2月28日に台湾全土で大きな暴動が起こり、命を失った3万人以上の犠牲者を追悼する記念日。台北駅近くには、二二八和平記念公園がある。

清明節 4月5日

1975年のこの日、台湾初代総統である蒋介石が逝去した。この日は、祖先の墓掃除をする習慣がある。年度初めのため、現地採用の教員だけが休日となる。

端午節 旧暦5月5日（2007年は6月8日）

中国三大節の一つ。戦国時代、愛国者であった屈原が、憂国のあまり汨羅江（べきら河）へ入水自殺した。それを惜しんだ人々は、彼を何とか助けようと我先にと船を漕ぎ出した。残念ながら助けることは出来なかったが、せめて、無事あの世へ行けるように、河の生き物に食べられないようにと竹の葉にご飯を包んで投げ入れた。これが、ドラゴンボートと粽（ちまき）の起源である。屈原が河に身を投げた旧暦の5月5日には、今でも各地でドラゴンボートレース大会が開催され、粽を食べる習慣がある。

中秋節 旧暦8月15日（2007年は9月14日）

1年でもっとも綺麗な月を鑑賞する日。この夜は、家毎にご馳走を作って、神や祖先の霊を祭り、豊作と家庭の安泰を感謝する。日本とよく似ている。こちらでも、月餅を食べる習慣は日本以上にあるが、最近では、月を見ながら、焼き肉を食べる方が多いようである。



台湾の月餅

国慶節 10月10日

もっとも重要な国家記念日。孫文率いる革命軍が1911年のこの日、辛亥革命を始めた。毎年、総統府前で記念式典が開かれたあと、パレードが台北市内を練り歩く。夜には、花火大会も催される。

その他

原住民の豊年祭や休日には指定されていない節やイベントがたくさんある。2000年までは、今以上に休日の節があったが、2001年に学校や公的機関が週休2日制を導入したのに伴い、平日扱いになった節もある。



4. 学校周辺のように

台北日本人学校は、台北駅から北へ12キロほどの天母の街の中心地にある。ここは、以前別荘地として開かれた土地であるが、徐々に外国人も暮らす国際色豊かな町へと変貌を遂げてきた。そんな天母に日本人学校が移ってきたのは、今から約20年前であった。

学校は中山北路と天母西路、天母東路の交わる場所に位置する。

この大きな通り名がこの周辺の住所となっている。ここでは、主に学校周辺を東西南北にわけ簡単に説明したいと思う。



中山北路6段は、学校から南へ延びている。(学校の住所は中山北路6段) この道は、台北市内へ続く主幹道路である。午後5時を過ぎる頃には毎日のように渋滞となる。街路樹としてガジュマルがいたる所に植えられている。ガジュマルは、沖縄などでも見られるが気根を持ったおもしろい木である。髪の毛のような気根をぐんぐん伸ばすため、たまにきれいに散髪されている。

道路沿いにはちょっと高めの和洋中のレストランが軒を連ねている。この他、様々な商店が続く。また、一步路地裏にはいると土東市場や朝市などの活気ある市場がある。ここでは産地直送の新鮮な魚介類なども気軽に手にはいるため特に朝は客足が途絶えることはない。

中山北路7段は、学校から北へ伸びる緩やかな坂道である。台湾銀行を皮切りにおしゃれなお店が続いている。坂を上るにつれて徐々に万年緑の山肌が見えてくる。陽明山である。この陽明山は、国立公園にも指定されており、休みの日には多くのハイカーで賑わう。

中山北路は、幹線道路としては、台湾銀行から約400㍍地点にあるロータリーで折り返している。このロータリー付近には、警察署・消防署があり、天母の街を見下ろすかのごとくにこの地に住む人々の暮らしを守ってくれている。ロータリーから東へ5分ほどの所には、緑豊かな天母公園がある。この公園は、天母地区に住む人々の憩いの



場所でもある。朝は、毎日太極拳やスポーツを楽しむ人々が多くいる。また、この付近は露天の朝市が開かれいつも賑わいを見せている。

天母西路は、学校から西に延びる。マクドナルドやスターバックスコーヒーなどの外資系のお店をはじめ、洋服・カジュアルの先端を行くお店が数多い地域である。この道は、一車線の通りであるが、交通量は一日途切れることはない。天母西路を200㍍ほどいくと天母北路に接する。天母北路は、陽明山に続く道で土日は、温泉や陽明山へ向かう車の往来も激しい。更に天母西路を先に進むと振興病院・榮總病院といった総合病院がひとときわ目に付く。特に榮總病院は、アジア最大規模を誇る病院で屋上にはヘリポートまである。



天母東路は、中山北路をはさみ天母西路と反対に東に延びている道路である。この通り沿いも天母西路と同様にいろいろなお店が連なっている。通りに入って直ぐの所には三玉宮という道教の廟があり、いつも線香の香りがしている。信仰心の厚い台湾人の一面が伺える。更に東へ進んで行くと忠誠路にぶつかる。この角に2年前三越デパートがオープンした。この忠誠路を南に行くと、広大な天母運動公園や緑豊かな天然芝の天母球場がある。この一帯は夜間も照明でてらされウォーキングやテニス、バスケットボールなどを楽しむ多くの人々で賑わう。更に南へ進むと日系の高島屋デパートがある。値段はやや高めであるが日本のものが手にはいるので台湾人だけでなく日本人も多く利用している。



このように私たちの勤務した天母の街は、国際色と緑に満ちた素晴らしい環境の中にあった。

5. 台湾現地校のようす

本校では、毎年「現地校を訪問し、台湾の教育事情や教育現場の様子を知る」ことや「本校卒業生の様子や、現地中学・高校（高中）の様子を知り、進路指導に生かす」ことをねらいとして、現地校訪問を行っている。ただし、台湾は学校によってかなりシステムが異なるようなので、進学の際はそれぞれの学校の様子を知ることが必要になる。



(1) 三玉國民小学校

日時 平成17年11月3日(木) 13:00~16:30

内容

ア 施設見学

三玉國民小学校は民國82年(西曆1994年)8月に創立された、比較的新しい学校である。各学年約10クラス程度の規模で、100名以上の職員からなる大規模校である。各学級とほとんどの特別教室にパソコン、プロジェクターがあること、パソコンやビデオ教材作成のためのスタジオも備えていることなどからも、情報機器の活用が進んでいることが伺えた。校庭はやや小さいものの、隣接する天母運動公園を運動場として利用することもあるとのことだった。

イ 授業参観

中学年の音楽、3年生・5年生の自然(理科)、5年生の英語、高学年の社会とたくさんの授業を参観させていただいた。施設参観の中でも述べたが、音楽でリコーダー指導に視聴覚教材を使いながら個別指導の時間を確保したり、3年生の理科では子どもたちが話し合い活動でまとめたことをノートパソコンにまとめ、全体にむけてプロジェクターを使って発表したりと、情報機器が授業の中で有効に活用されていた。また児童も機器の操作に習熟していた。



ウ 懇談会

懇談会では、三玉國小の概要を説明していただいた後、台北日本人学校の授業の様子についても紹介する時間を取り、その後、見せていただいた授業ごとにグループを作り、グループディスカッションを行った。特にテーマを定めず授業のこと、台北の子どもたちのことなど様々な話題について情報交換を行った。

(2) 石牌國民中学校

日時 平成17年11月3日(木) 13:40~16:30

内容

ア 施設見学

石牌國中の先生方の御案内で、特別教室を中心に校舎内を見学させていただいた。生徒数3千人を超える台北ではNo.1の大規模校であり、校舎は広く、3階建ての体育館や屋内温水プール、また教職員の子息が主に利用する幼稚園まで校内に備えている。



イ 授業参観

これだけの大規模校であるため、すべての学年であらゆる教科の授業を1時間の中で参観することが可能であった。授業はマイクを使った一斉授業の形態が多く、ほとんど教師の説明で授業が進行していくことが多い。そのような教育を問題視し、最近では教育改革を図っているようであるが、基本学力試験の存在もあり、なかなか改革が進まない状況のようである。



ウ 懇談会

まず初めにあらかじめ日本人学校の教師から集約した質問に答えていただくような形で、現在台湾が抱えている教育上の課題や石牌國中での取り組みについて校長先生から説明していただいた。その後3つのグループに分かれ、学習指導と進路指導、生徒指導、学校行事と課外活動をテーマに懇談を行い、現地の教育に関する情報を得ることが出来た。

(3) 天主教静修女子中・高中

日時 平成18年11月30日(木) 13:20~16:30

内容

ア 施設見学

静修女子高中は創立90年を迎える歴史あるカトリック校。生徒数2482名、54クラスの大きな高校である。校舎はとても大きく綺麗で、施設・設備も充実していた。礼拝堂や、日本語指導用の和室などもあった。電光掲示板で、その時節に応じた情報を流したり、校内での連絡事項等を知らせたりしていた。すべての教室が見渡ししやすいように、校舎の配置が工夫されていた。



イ 授業参観

どの教室も40人~50人程度の生徒が授業を受けており、教室の中はやや狭く感じた。しかし、どの生徒も真剣な眼差しで授業を受けており、学習への意欲の高さが感じられた。授業は朝8:10~17:50まで、間に昼食休憩が1時間あり、高級中学では1日9校時まで実施されている。軍事教練や国防通識など、軍事に関わる授業も行なわれており、実際に銃の取り扱い方や構え方なども学んでいる。日本や外国から来ている生徒に対しては、一日1時間程度の中国語指導も行なっており、外国籍の子どもたちへの配慮が感じられた。



ウ 質疑応答

Q. 女性には兵役もないのに、軍事訓練を行なうのはなぜか。

A. 有事の際に台湾の人々全員が対応できるようにするため。

Q. 日本に対する生徒たちの関心は高いか。また、なぜ日本語の授業を行なうのか。

A. 日本に対する生徒たちの関心は非常に高い。また、生徒の祖父母が日本語を話せる場合もあり、子どもたちの生活環境の中にも日本語が多く出てきているようだ。日本への留学なども視野に入れながら学習をすすめている授業もある。

(4) 天母國中

日時 平成19年12月6日(木) 14:00~16:00

内容

ア 施設見学

全校生徒数2280名(20クラス)、1クラス37~38名、教職員181名の大きな中学校である。校舎内外ともに綺麗で充実している。図書室も生徒以外にも教職員専用図書室が整備されている。パソコンルームも40台以上がきちんと稼働し、週1時間専科専科の教師より、検索方法・タイピング技能・映像処処置等を学習している。



イ 授業参観

どの教室も40人弱の生徒が授業を受けており、教室はやや狭く感じられた。しかし、生徒たちは、どの授業も楽しみながらも真剣に行っており、学習意欲の高さが感じられた。登校時間は7時30分までで、10分間の清掃、20分間の朝会・朝自習を経て、45分間の授業が8時間(17時まで)行われる。昼食・昼寝を含む昼休みが40分間あるのも1つの特徴といえる。

ウ 質疑応答

Q. 進路の状況を教えてください。

A. 5割程度の生徒が普通科の高校(公立)に進学する。ほとんどの生徒が17時以降も自主的な学習を行っている。

Q. 音楽の教育課程上の特徴は?

A. 1年はリコーダーをマスターし、2年で美術と連携する学習、3年で卒業音楽会を企画する等、発展的学習を考えて取り組んでいる。

終わりに

台湾で過ごした3年間。報告書には書ききれない様々な出来事がありました。台湾での暮らしは、海外生活での苦勞を想像していた派遣前では考えられないほど、過ごしやすく素晴らしいものでした。それは、親日的な台湾の国柄、やさしくてあたたかい台湾人の人柄、さらに発達した物流やインターネットなどの通信手段などによるものだと思います。

日本人学校での勤務においては、様々な方との出会いから多くのことを学ぶことができました。日本各地の都道府県から派遣された先生方との出会い、現地採用の中国語や英語・音楽や図工の先生方との出会い、事務職員やバスの運転手・守衛さんたちとの出会い、保護者や学校運営委員会・台湾日本人会の皆さんとの出会い、そして児童生徒との出会いがありました。そのみなさんの多様な価値観、生き方、知恵などから学んだ事は、海外派遣においての一番の財産になりました。特に、それぞれに違う環境に身を置きながら過ごす子どもたちのたくましさや柔軟な発想を目の当たりにして、子どもたちの可能性を再発見したように思います。

最後になりましたが、海外派遣に関わってお世話になった皆様に、心から感謝をいたします。今後、この海外派遣で学んだことを生かしながら、これからの世界を担う、大切な子どもたちの教育に、力を注いでいきたいと思ひます。

